



福祉見てある記46

なんでも相談室の相談員

今回の「福祉みて歩き」は、今年4月、本学に設置されたなんでも相談室に着目しました。「相談員の方は、どういった方でしょうか?」。そんな素朴な疑問からお一人おひとりにお話しを聞きました。

1. なんでも相談室：キャンパスソーシャルワーカー (CSW)

★月曜日・木曜日担当

野満万里子さん（社会福祉士）：高齢者施設に勤務経験のある野満さん。



CSWへの関心は、学生時代の中高生の相談に応じるボランティアにあったという。「大学の中に居場所を見いだせない」、「友人がいない」。

中高生の相談は、大学生になっても解決できていないことを痛感した。一方で、一人になれる場所、人とつながる機会を求めていることがわかったとのこと。また、本学の充実した学生支援環境をいかしきれていないという側面も感じるという。「一人で悩まず、まず話してみても」をモットーに、相談に応じていきたいとのこと。

★火曜日担当

松下勝司さん（司法書士・社会福祉士）：成年後見人として複数の権利擁護にかかわる松下さん。また、日本スクールソーシャルワ



ーカー学会会員で、非行少年の親子関係や学校との関係調整にも取り組んでいる。本学CSWの特長であるアウトリーチは、

松下さんの日々の活動では当たり前という。

活動をはじめて二カ月余りだが、深刻な相談事案もあるという。当初は、サークル選択の迷いや人間関係だったが、やがて「大講義室に入れない」、「集団の中に入ることが不安」といった深刻な相談もあった。

「気軽に、楽しく、前向きになれる相談」をモットーに、学生の相談に応じていきたいとのこと。

★水曜日・金曜日担当

永野明子さん（社会福祉士・精神保健福祉士・保育士）：



普段は、しょうがい者の就労支援を中心に活動されている永野さん。CSWへの関心は、周産期から小中高と

いった学齢期、そして就労期に関わるなかで、大学四年間が本人にとっていかに大切かを痛感したためという。学生自身も誰かの支援を受けることで、自分の状況を振り返り、方向性を見いだしてほしいと語る。現在、本人同意のもと、数件ではあるが個別の支援計画を立て、学内外の関係機関と連携をしている。

「本人や家族が問題を先送りせず、支援者と共に向き合い、納得しながら気づいていく」をモットーに、学生の相談に応じていきたいとのこと。

★黒田信子さん（社会福祉士）：CSWのスーパーバイザーを

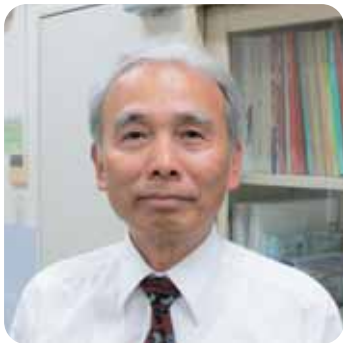


担う社会福祉士。小中高等学校で先行導入されているスクールソーシャルワークの経験を有する黒田さん。

CSWを束ねるスーパーバイザーである。「人間関係、進路、家族、生活費や学費など、一人で悩んでいませんか。一緒に考えます。相談室で待っています」とのメッセージをいただいた。

2. なんでも相談室：相談員

原 順彦さん：教育センターと兼務し、月



曜日から土曜日まで毎日相談に応じる原さん。「事を成し遂げるものは、愚直でなければならぬ」と勝海舟の言葉を引用され、

「難しい課題でも、ひとつひとつ真面目に取り組むことで、必ず成し遂げることができる」を学生諸君に期待しながら、相談に応じているとのこと。

3. おわりに

CSWらの話を聞き、次のことを思い出した。それは、平成23年12月17日・熊本学園大学附属社会福祉研究所で開催した大分大学大学院の平塚良子教授（専門：ソーシャルワーク）による「キャンパス・ソーシャルワークの導入－意義と課題－」をテーマとする講演会だった。今後の期待を込め、その一部をご紹介します。

1. 大分大学では、2008－2009年の相談学生120名のうち、学業面や対人関係で改善をみた学生は、74名（61.7%）とのこと。
2. 来室しなくなった学生にはメールや手紙・電話、家族支援や家庭訪問などアウトリーチ型支援によって、2008－2009年度相談継続率が48.6%（2005－2006年度：29.2%）まで上昇した。
3. 2009年度から週一回のグループミーティングを実施し、対人関係やソーシャル・スキル、精神面でプラスの効果がみられた。
4. 留学生や帰国子女の利用もみられた。

出典：熊本学園大学附属研究所研究会「キャンパス・ソーシャルワークの導入－意義と課題」講師：平塚良子（大分大学・教授）、2011年12月17日実施報告資料より。

（本研究所研究員

黒木邦弘 ソーシャルワーク）